

木野会報

Vol.

3



特集●座談会 自然と環境…①

CAMPUS REPORT…⑦

ベストセラー? 発見…⑧

TEACHERS VOICE…⑨

木野会数珠つなぎ…⑩

Who's Who 西日本支部発動…⑫

INFORMATION…⑬

自然と環境

開催日▼一九九五年六月二五日

会場▼京都精華大学

今、自然といかに生きるか、環境

をどう守り暮すかが問われる中、

一月十七日の阪神淡路大震災、た

った二十秒の間に多くを失った。

地震から学んだものは、決して忘

れてはならないでしょう。六月二

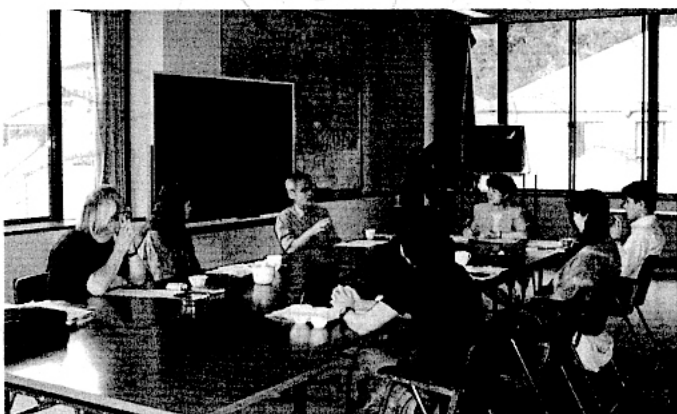
十五日神戸、大阪で地震を体験な

された方々と普賢岳でボランティア

活動をされている方をまじえて、

自然と環境について色々な角度か

ら話し合っただけです。



■出席者

植田 劭 (人文学部教授、生活環境論)

赤坂 博 (六八年度美術科絵画入学木

野会会長)

和田 鈴子 (六八年度美術科デザイン入

学、旧姓西川)

山野 高宏 (八九年度人文学部入学、木野

会評議員)

小林 東子 (九二年美術学部日本画入学)

酒井裕佳子 (九三年美術学部版画入学)

■司会

荒賀依右子 (六八年英語英文科入学、旧姓

青谷)

荒賀●自然と環境という少々堅い内
容ですが、どうぞ気楽にお話く
ださるようお願い致します。

阪神淡路大震災を体験され
た三人の方々のお話を伺

うところから始めた

と思います。は

じめに山野さん、

お願いします。



山野●普段は一度寝たら、たいていの音では起きないのですが、あの時は何かゴーツという音でまず目が覚めまして、音が鳴り止んだかなと思つたら、途端に揺れ出しました。初めは、「ああ、地震か」と思ったんですが、急に揺れがひどくなってきて、物は落ちてくるわ、倒れてくるわで、最初は冷静だったけれど、徐々に恐ろしくなりました。外に出てみると、裏の家の蔵は潰れているし、時間が経つにつれて、被害の甚大さがわかってきました。

樋田●豊中のどの辺ですか。

山野●岡町です。結構古い家が多かったので、駅から家まで三、四軒の家が倒れていました。

街なんて都市なんてい どうなるかわからない

荒賀●酒井さんの所はいかがでしたか。

酒井●わたしは自宅が芦屋市で、たいていの人は、「まず地震がきて、横にゆれて」と言われるけれど、私は十五センチぐらい浮いて寝ていたような感じでした。家から一キロぐらいの所で阪神高速が倒れ、阪急電車の高架も落ちたりしているんですが、音はあまりなくて、本当に浮いていたなあという感じです。判定では全壊になった自宅ですが、幸い原型は留めています。だからその時も、抜け出せなくはなかったのですが、ドアまで行けなくて、周りもパニックになつていて、「早く出なきゃ」と思っているところへ知り合

いが駆けつてくれて、出してもらいました。とりあえずガラスだけきれいにして母と二人で布団をもって避難所まで二十分ぐらい歩いたんですが、ぐるぐる回りながら、「この道だめだ、この道もだめだ」みたいに、爆弾を受けたという感じの情景で、戦争を体験したことはないのですが、本当にめちゃくちゃになっていて、これを人為でやる戦争なんてとんでもない、と考えていました。震災の直前に、サラエボの स्वाダ・カティキさんの「街なんて都市なんていどうなるかわからない」という話を聞いていたので、こんなに早くめちゃくちゃになったと思いつつ、これは長丁場になると考え、自宅から取れる荷物を取つてその後二カ月を避難所で過ごしました。母は市内の仮設住宅、私は大学近くに下宿という現状です。

酒井裕佳子



荒賀●小林さんはどのような体験なさいましたか。

小林●当日、私は京都に

いました。父からの電話で目

が覚めて、「大丈夫か、生きてるぞ」と言うから、何があつたのかなと思

つたら、「地震や」というそのわずかの時間

間で電話が切れてしまつたんです。テレビ

をつけたら、八十人ぐらい死亡と言つ

ていました。私の家は神戸市灘区で、崖

の上に乗つてる古いアパートなんです。

だから崖崩れするかもしれないと思つて、

二〇〇〇のバイクに乗せてもらつて神戸

まで向かつたんです。高槻の辺りから

車が大渋滞していて歩道をバイクで行つ

たんですが、西宮あたりから道路に亀裂

が入り、普段は絶対に開いているコンビニ

二エンスストアとかガソリンスタンドが

閉まつていて、電気もついてなく、道路

も通れない場所が一杯あつて、五、六時

間かかってやっと家に着きました。幸い

皆無事でしたが、家はクチャクチャでし

た。姉や母は余震にとても神経質で、地

震の恐ろしさが私に伝わってきました。

荒賀●最初は廃墟の中で何も手につか

なかったけれど、徐々に皆が立ち上がつて

いく避難所の生活に活気さえ感じられた

のですが、いかがでしたか。

酒井●よく報道では、皆一つに団結して

というぐあいに伝えられていましたが、

最初はみんなパニックでゴミも何もかも

混ぜこぜで、トイレも大変でした。お年

されていたようですが、震災の後の一日、二日は一人でお手洗いにも行けなかったけれど、一カ月、二カ月してくると、だんだんシャキッとできて、這ってしか動けなかったお年寄りも、ある日パンを配り出したりと、その底力に感心させられました。

小林●私は三月の休みの間に、長田の真野地区にボランティア活動に初めて一カ月行き、ダンボールを利用して仕切りや家具を作っていたのです。おばさんが強いなあと思いました。すべてを失った人達なのに明るい。ボランティアに頼るのではなく、パッと見たらヤンキーかチンピラ風の近所の大将が取り仕切り、てきぱき指示しているのを見たとき、ボランティアに行つて教えられたと勉強になりました。

まちづくり運動の先駆、 人と人とのつながり

荒賀●都市や街を考えると、私たちは「建物や交通、行政があつて初めて街かな」と思っていました。でも、本当は人と人とのつながりがあれば街の機能を果たすということなのでしょう。

山野●長田区真野町は、全国的に見ても、まちづくり運動の先駆的な所であり、三ツ星ベルトという工場の公害問題が起つたのですが、それが工場の排除運動ではなく、住民と企業が共存するためには、どうあるべきか、専門家も交え、まちづ

くり運動として展開し、現在でも、地域のコミュニティがうまく形成されていた。ですから、今回の地震の時に火災が発生しましたが、住民と三ツ星ベルトの社員が一丸となって火を消し止め、火災の被害を最小限にとどめることができました。

そして震災直後から、多くの専門家が集まり、避難所生活を少しでも快適にするために、また、真野町が一日も早く立ち直るにはどのようにすれば良いか、そして、それをシステムとして他の町でも運用できるようにするにはどうすれば良いかなど、色々知恵を搾つた、阪神地区の中でも特異な地区です。

逆に、マンションや一戸建住宅団地は、日頃差し迫つた問題もないので、地域住民のつながりは弱かった。だから震災が起こつても、最初のうち住民同士、どう関わつていけば良いのかわからなかった。しかし、日が経つにつれ、色々なことが

山野 高宏



わかり、協力しあうようになった。

都市というのは、機能と効率に象徴されて、近代産業の発展と共に大きくなつた。そしてこれからも、その影響を脈々と受けながら拡がり続けようとしていた。しかし、この震災は我々にこれからの都市が、近代化の過程では捨象されていた、都市の中で人間らしく生活を営むために必要な概念を、復権することが必要であることを、改めて問い直す機会を与えてくれたのではないだろうか。

酒井●私の住んでいる芦屋市の中で一番被害のひどかつた津知町はすごく古い町で、もともと自治会もしつかりした所で、テント村を組織して、自警団をつくつて市に交渉して水道を引いて、電気を頼んでとすごく速かつた。また、ピアノを持ち込んで弾いてみたり、人形を飾つたり、桜の花がすごくきれいな所で自警団の提灯と花見提灯をかざつたり、本当にユーモアを持って生き抜こうというのが見えて、すごいなあと思いました。一方、芦屋市の埋立地の高層住宅の人々は郊外へ避難する人も多く、日頃のコミュニティの強みの差を感じました。

和田●あの時は一番に救護物資を持って熊本からも行つています。町と町同じ名前の町同志が提携してたりとかでね。その後、友好関係のようなものを結んでいたらお互い協力し合えると思ひました。一種の人と人とのつながりです。



司会●荒賀依石子



土のある生活 根強い力

榎田●淡路島と阪神地区との差は、炊き出しをしなくてもできない阪神地区と、それに対して地震が起こった日の夕方には炊き出しを始めている淡路島にあります。これは何を意味するかというと、大きな町と小さな町、地域のコミュニティがバラバラが形成されているかを端的に示すものです。酒井さんが言われた高層ビル、あそこでは地域社会が成り立っていない。人間と人間が付き合うには土のある広場があるわけです。そのコミュニティがよしんばあったとしても、水道もガスも電気もなかったりという時にいったい我々は何ができるのか、それで淡路島の風景を見るとやっぱり七輪、かまどなど、すぐそろいます。そういう物が無い限



榎田 劭

り、いくら〇〇いと思ってもできない。マッチで火を点けて物を燃やすという、生活において基本的に必要とするような地域社会、暮らしの知恵、材料などは大都会では完全にはないのです。実際、自分の家の中を眺めると、家具で家の中をいっそう狭くして生きている。そのことがたくさんさんの命を奪ったことも考えて、もう少し簡素な暮らしというものを持つ意味もできて、いろいろ反省点もあります。

小林●私の母が自然食品とかに興味があり横の崖を耕して農園にしてみました。人々がスーパードで並んで缶詰を買っている時に畑の作物を食べることができ、お風呂は氷上の牛乳屋さんの紹介で氷上市の蔵にあった、木炭四〇個で焚く風呂を一時的に貸していただいていたっていました。母の自然流の生き方に感銘を受けました。

榎田●今の都市型生活というのは崩れることが見えていると思います。それなりに備えてあると、備えた分だけ慌てなくて済むというのが小林さんの話されたことだと思います。木だつてそうです。私は被災地を何方所か見て回っていますが、地震で倒れた木はないですね。それは大地に根を張っているものの強さで、それに引き換え、大きな高層ビルが真ん中で折れて倒れて崩れたりということでは、何を拠り所にして生きることかということを問われたと思います。

小林●被災者対行政ということで、行政批判に集中する行政側の人も皆被災者で



小林 東子

あるのにも少し優しくできないのかなと感じました。皆が社会の一員という意識がちよつと足りないなあと思いました。榎田●税金払っている行政だからしくて、当たり前前、それは当たり前といえは当たり前なんです、行政には税金さえ払っておけば、後は任せて知らん顔というのでは困る。地域社会の主人公は自分たちなのだから、自分たちの生き方は自分たちで隣の人と助け合ってやっていく。本当に大事なのは民主主義社会として自分たちがその社会の主人公なんだということ、もつと日常的に大事にしておかないと、こういう災害の時にやはり対応できない。

命、なにしろ初めてのことで●



何が一番必要なのか

荒賀 ●さて、子供達も深い心の傷を負いました。避難所となった学校ではどんな教育がなされたのでしょうか。

赤坂 ●私は当時、単身赴任で神奈川県におりました。朝のテレビで第一報を聞いた時は、たいしたことはないと思いましたが、時間の経過とともに不安はつづるばかりでした。連絡はつかず、何も自分が取れる手段がない。都市の生活、環境あるいは経済活動が実にもろい。家族と別れて暮らすということが、いかに異常なことか、日頃は何ということはないんです。お酒飲んで帰って夜中に電話かけても、いつでもかかるわけですし……。今までは子供の教科の点数ばかりが気になっていたが、もうそういうことはどう

赤坂 博



でもよくなったという人が多くいると思います。やはり友達同志の付き合いや、共同生活をどうするかのほうが大事だと言います。今まですごく信じてきたことが目の前で全部だめになって、今要求されているのは、人間が生きて行くのに何が必要なのかということ、本当に子供達は生活の場の中で見せられているのです。戦争が終わって価値観が次の日に全く違っているのと似ていると思います。

和田 ●島原の場合は、雲仙普賢岳が現在活動を停止していますが、いつ爆発するか分からない。いまだに灰が降ってくる地元の生活、彼らに何が一番必要なのか。最初はお金を送っていたのですが、本人には届かない。それよりずっと見つけて元気づけてくれることを望んでいた。だから忘れないで長く続けるために何がいいのかを考え、子供達に何かできることがあるはずだと思い、去年陶芸窯を送ったのです。子供達もすごく恐ろしい体験をしたのですから励ましたり、違う角度からの応援が必要だと思えます。その窯で出来上がった物はきつと大事にしてくれると思います。そして、何かをさせていただくことによって私たちが頑張る。お互いに長く共生していけたらと思います。

酒井 ●これから次世代に伝えていかなければならないのは、人と人のかかわり方がどうあるべきかということです。

植田 ●私は大学で教育責任分担をしている立場として言いくいけれど、今の学校教育もバクです。子供達が何のた

和田 鈴子



めに勉強したらいいのか誰も教えていない。自立することを教えていない。自立してないから生きることに自信がない。生きることに自信がないから簡単に言えば、パニックに巻き込まれる。「何が教育なのか」と言えるような大学の有り様、あるいは子供達の育て方を考えなければならぬ。

赤坂 ●かろうじて僕たちの年代はお風呂やご飯に薪を使っていた年代でしたし、小学校の存在が地域のコミュニティの一つの核になっていたのです。

植田 ●避難所が今度は核になったのです。

赤坂 ●今は火を起こすこともレクリエーションでやっている。そう

●天災にひるむ人災



いうことを地域の人達とのかかわりも含めて教育として、一貫して伝えていかないと……。

榎田●暮らしの中で地域に根ざしたその地域らしい教育が行わなければならない。その地域固有の風土、固有の人間関係の中で、人々は生きないと。この大災害に耐えられるための社会を、教育を取り戻さなければいけないのです。

和田●今はこどもの関係が横割りで、同じ年齢の子供としか遊ばない。そこで熊本で取り組んだのが地域のおじいさん、おばあさんを巻き込んで、地域の中で何かできないかと思ひ、昔の人ならではの縄編みとか竹トンボ作りとかを子供達に伝えてもらいたい。いろいろな人の知恵の出し合いの中で育ってもらいたいのです。

荒賀●震災から学ぶものは実に深いと思います。酒井さんや小林さんは絵の描き方などに変わりはありましたが。

酒井●パニック状態の時、芸術作品とかに支えられるものがあると思います。娯楽とか、絵とか、音楽などが欲しくなるのです。絵が描きたいとか、見たいとか、ずっと思っていました。

小林●神戸にいた一カ月ぐらひは、毎日生きるための生活というか、必要最低限のことだけで、何か空しいこともありました。テント村に遠くから歌手が来て、歌を聴いたりすると明日からも頑張ろうという気持ちになったりしました。京都に戻って生活が元に戻ると、なんて贅沢なことをしているんだらうと思ったりしました。

いかに生きるか

荒賀●私たちにとって、「いかに生きるか」ということは永遠のテーマです。では最後に、「精華大学がどのような大学であるべきか」について、一言ずつお話しください。

山野●今度の震災では、下町という都市化の中で置き忘れられた、都市の周縁部から発生した、人間らしい生活の形態が情報となって中心部へと広がっていった。

中心と周縁という関係というなら、精華大学は、学歴社会という枠組みの中では、周縁部に追いやられている大学だけれども、本来あるべきモノヤコトを確実に生み出し、常に発信している大学になって欲しいと思います。

和田●まわりの景色が二十年以上前とさほど変わっていないで、まだ畑があり、木々が一杯あって、ほっとしています。この環境で学べるといふのはすごくいいと思う。それは、どんな所へ行っても生きる強さを養います。また、精華を卒業してよかったと思えるような人達との出会いをしてもらいたいと思います。

小林●環境はとても気に入っていますが、どっぷり精華に浸るだけでなく、外とのつながりも持っていたいと思います。

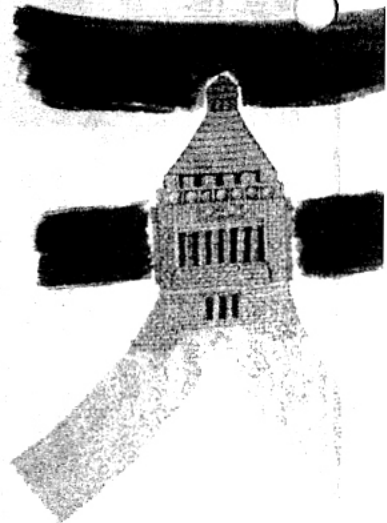
赤坂●最近、少々危惧するのは立派な学舎等が増えていることです。ありがたいと思う反面、当たり前の大学にならなければいいなと思います。精華大学のよか

ったところをもっと伸ばしながら、発展していつてもらいたい。

酒井●自立した人間として、社会へ発言できる大学にしたい。せっかく表現手段を学んでいるのだから。発信地になっていけたらと思います。

榎田●工業文明というのは必ず崩れるもの。続くはずがない。これは地震を見るまでもなく明らかなのです。お金を求める物の豊かな世界を作り上げていくことがいいとするような価値で動いている世の中とは違う価値観が、この大学にあることを私は願ってきたのです。「生きる」って何かを真に問える大学にしたい。同窓会や在学生の皆さんに厳しい意見をどんどん言って欲しい。と同時に、百点満点のことはできない。冷たい批判ではなく、矛盾を抱えたものを一緒に進むような、そのことよって初めて、自信を持って経済の論理ではなく、文化の論理で動く人間になれるのではないか。生活の文化、自立的な文化で。

荒賀●たくさんのご意見をありがとうございます。学ぶところがいろいろありました。精華大学の発展のために私たちが頑張りたいと思います。



イラスト●南久美子

阪神淡路大震災

寄付金募集ご協力のお礼

同窓会「木野会」会長

赤坂 博

先の震災で被災された在学生を支援するために「被災者援助基金」が大学に設置されることになり、同窓会としても皆様にご協力をお願いいたしました。ご多数のご厚意が寄せられました。

どうもありがとうございました。

「木野会」からは被災地区の卒業生の皆様にお見舞状を送付させていただきました。

継続的な支援活動をおこなうため今後とも会員の皆様のご理解、ご協力をお願いいたします。

「サークル紹介」

セイカ・ウインド・ソサエティ

はじめまして、セイカ・ウインド・ソサエティです。

私たちは昨年6月に、今まで洛北地域になかった、一般団体の吹奏楽団(学校のOB吹奏楽団は除く)を創ろうと精華大の卒業生・在学生が中心に呼びかけました。

吹奏楽を通して、大学と地域社会を結ぼうということをテーマに、一年半経過しました。現在団員数は十五名を越え、岩倉や市原に住んでいる人や仕事がある人はもちろん、中には山科や伏見の方からはるばるやって来る人までいて、最近では大学関係者が少数派になっていきます。

今後の目標としては、来年二月に第一回目の演奏会を開催することです。こちらも少しずつですが、準備を進めていっております。また、精華大の学舎のある朽木や丹後の人たちとも交流ができたというような話があったり夢は広がる一方です。

まだまだ少人数で演奏技術も未熟で活動も大変ですが、少しずつ仲間を増やし成長していきたいと思えます。木野会の方々のご支援ご理解とをよろしくお願いたします。



第一回演奏会のお知らせ

一九九六年二月下旬に、大学にて、小さな演奏会を催す予定ですが、なお日程等は未だ決定されておりませんが、詳しい情報を知りたいという方は次のところまでご一報下さい。案内状等をお送り致します。

山岡 寛(85P)
TEL (075)

702-6809

尚、団員も引き続き募集中ですので興味のある方・入団御希望の方は、お気軽に御連絡下さい。

「新キャンパス二期計画完成!!」

この秋、厚生棟(悠々館)、クラブボックス(遠友館)、体育館が完成しました。そこで今日、使い心地を在学生にさりげなく聞いてみました。

まず食堂、留学生の人たちです。

留学生 A 「今までの食堂に比べてすごくよくなった。」

B 「味もよくなった。」

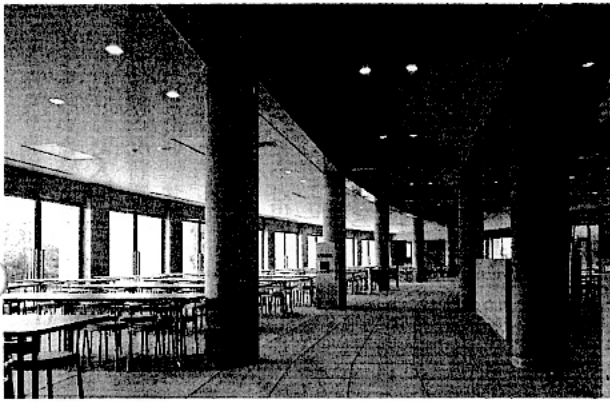
C 「味はまあまあかな。」

店長にも聞いてみました。

「売上げは、ぼちぼちかなあ。」

少し不安を残して去っていききました。

大丈夫でしょうか。不二家の皆さんがんばって下さい。

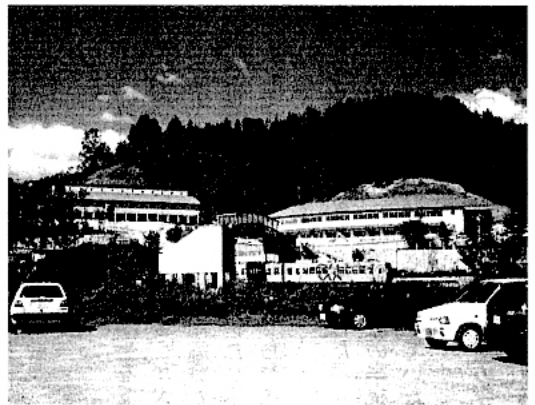


次に、クラブBOXについて、あるクラブの方に聞いてみました。

D 「クラブ一つ一つにBOXがもらえてうれしい。」

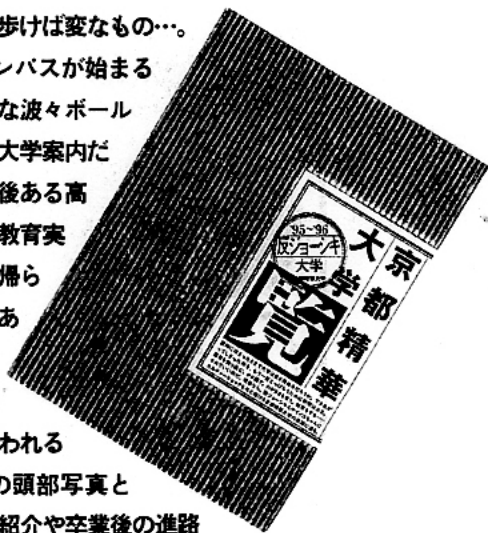
E 「ちよつと不満を言えば、天井はきれいだけど、壁と床がきたない。かべはブロックむき出しやし・・・」

少し不満もあるみたいですが、全クラブにBOXが出来たのは、うれしいですね。また、クラブボックスの山側にテントが出来ています。これは、計画段階の時、その当時の自治会長・学友会長の発案でクラブのみんなが交流したり、簡単なコンパが出来ると、ここに設置して欲しいということでした。多くの卒業生も関係しているという証拠ですよ。十一月の、同窓会の総会、懇親会、木野祭に来るついでに、新しい施設ものぞいてみませんか。



「ジョーシキはずれ」 ベストセララー？発見

犬も歩けば何とやら、精華大学歩けば変なもの…。'95年初夏、大学のオープンキャンパスが始まる頃、無印良品の店で見掛けるよおな波々ボール紙に身を固めた本を校内で見た。大学案内だろうと気にとめずにいると、数日後ある高校の先生から「あんた所の先生、教育実習の研究授業の時こんな本置いて帰りはったで」と、見せられたものはあの波々ボール紙の本であった。ページをめくると先づ目に飛び込んてくるのは、とんでもないと思われる青藤 博 学長の写真、客員教授の頭部写真と続々と展開される。確かに学部の紹介や卒業後の進路などの伝えなければならない点もしっかり編集されているのだが、読み終わった後脳味噌に残るものは本のサブタイトルでもある「反ジョーシキ大学」の部分だ。あるページの一節に“精華大学志望者は読まないください”と明記されているにもかかわらず志望者達に配布している。この反ジョーシキ的な行為が敢て伝統というならば、この本の「転載・複製を禁じます」の文章を横目にこの紙面に転載している同窓会もやはり精華人であるのだろう。



TEACHERS VOICE

ティーチャーズ
ボイス

地震から得た教訓

人文学部教授 中島和子



多くの事を大震災によって考えさせられたが、その一つは、大災害の中では、人の生き死には紙一重であること、またその紙一重については人智を越えるものがあるということだった。

最初の五秒は殆ど人体に感じないほどの微震だったが六秒目になると突如として激震に転じ針の上

下振動は地震計をはみ出してしまった。そして次の十秒足らずの間に、すべてが決した。五〇〇〇人をこえる命が奪われ、どんな建物であろうが倒れるものはすべて倒壊してしまった。その恐ろしい自然の力は、人間の感知能力をはるかに越えるものだった。多くの人は地震とは思わず爆発か又はジェット機の墜落かと思ったと言う。

私は、その朝非常に心地よい夢をみながら眠りの中にいた。すつと滑り台を滑り降りる夢をみ、この気持ちよさは一体何だろうと思つて目が覚めた。するといつの間にか私はベッドから出て枕元に立っているではないか。驚いてすっかり目が覚めた次の瞬間あの大地震が起きた。やがて揺れが収まったので部屋の外へ出ようとしたが落下物が挟まってドアが開かない。手探りで落下物の一つ一つ取り

り除いて食堂へ出、ふと東の方を見るとまだ真暗な玄関に、ぼーと小さな明かりが見えるではないか。何と下駄箱の上に置いてあった懐中電灯が投げ出されたショックで灯をつけたのだった。それをもつて寝室へ戻るとベッドの頭の所へ重い鏡が思いがけない所から飛んできていた。それにしても私をベッドから脱出させたものは何だったのだろう。

ところで今回の地震から得た教訓のうち、特に伝えたい事を二点に絞ると、一つは、冬の夜明け前。午前五時四六分という時間は奇跡的であつて、あと三〇分までは一時間遅ければ被害は何十倍にもなった点だ。今回の地震は、直下型地震の被害としては例外的に少なく決して見本にはならないということだ。

第二は今回の地震が大いなる警告となつた点です。殊に地方自治体や国家の防災対策に対する警告には測り知れないものがあります。その一部は指摘されていますが比較的その責任が曖昧にされているものとしてガス漏れによる火事の延焼が挙げられます。原因が電気であれストーブであれその火が一旦ガス管に引火するとまるで火災放射器です、火がガス管の中を走ると言われています。忽ちのうちに拡がり水の無い被災地を火の海にします。まる一日、ガス会社はガスの元栓を切ろうとしなかったのです。ガス漏れは火事のみならずガス中寒、という被害をも出すのです。同じく直ちに行動をおこすべきは消火活動です。直ちにヘリコプターを飛ばし、まだ煙一筋二筋上った時点で消火器を下ろすか又は消化器を背負った消火夫を下ろして消火に当たることです。けが人の救出にも訓練されたヘリコプター部隊の敏速な行動が必要

思い浮かぶ情景

事務局総務課 斉藤幸代

(旧姓 相野谷)



赤ボックスと呼ばれて親しまれてきた自治会ボックスがこの夏、解体されました。

そういえば私が勤めた頃(20年前になるが)には事務局の前には小さな池もあった……

なくなつたもの、新たなもの、姿を変えて存在するものといういろいろあるが、ずつとなくしたくないものはなんやろかと考える時、思い浮かぶ情景があります。

それは、勤めて一年目の大学祭でのこと。当時の学園祭という学内でお酒が飲めるのは珍しかったが、セイカはそんなことこ吹

く風で、夜になると祭りは盛り上がり、教職員も学生も、車座になつて地面に座り込み、焚き火を囲んで飲みそして語り合いました。男も女もない。その自然さに新鮮な驚きを持ちました。失いたくないものはここにあり、と思ひました。

68年の創立以来、徐々に増え続けた学生数が三千人を越えた今、ゆつくり語りあうことは難しくなつてきているが、時折尋ねてくれる卒業生の顔を拝見し、思い出話をするひとときは実に楽しい。みなさん、お元氣ですか？

国家は国際的救援活動を積極的に受け入れること、自衛隊を解散して災害救助隊に生まれ変わらせるとともに、充分の予算をとつて地方自治体を単位とした敏速かつ高度に訓練された多種機能をもつ「救援ヘリコプター部隊」を育成・配置し、救援活動の軸とすること。地震が原子力発電所を襲う危険を考へて、原発を廃止し太陽エネルギー推進へ切り替へること。現代人は科学と開発の名のもとに地球環境を破壊し、それが天災を誘発しているにもかかわらず、政府はその根源を絶つ有効な政策を採つていないのです。この危機時代を生き残るための積極的な対策——それは家族から地方自治体、国家にいたるあらゆるレベルでの防災対策で、これこそ今回の阪神淡路大震災の警告ではないでしょうか。



海外卒業生探訪

事務局国際交流課 仁藤正幸

国際交流課、少々古い卒業生には耳慣れない事務局の窓口だが、本館3階のその課の扉を開けると、馴染深い佐藤さんの顔が伺えた。学生時代、就職やクラブでお世話になった人も多だろう。単に職員と学生という関係でなく、どこかそれ以上の信頼感をだれももったのではないだろうか。そんな佐藤さんが、この一年の間にアメリカ・韓国・モンゴルを訪ねられた、そこで出会われた卒業生達の近況を今回聞くことができた。



■ニューヨーク支部訪問

一昨年、同窓会東京支部の発足にあわせて、ニューヨーク支部が発足した。昨年十一月から十二月にかけて、協定校であるアンテオーク大学（オハイオ州。人文学部）とミシガン大学（ミシガン州。美術学部）を訪ねた機会に集まってもらった。その時の顔ぶれは次のとおりです。

支部長 辻本達男(71T)、総務 牧浦知子(76M)、事務局長 石川高明(78D)、松永充康(75E)、富永隼人(75P)、劉優貴子(79E)、氏家齊志(81T)、岩崎仁美(81T)、柴田康行(87H)。

画家の白井昭子さん、夏休みに本学で紙すきの実習をしたジル・ポテン(コロンビア大学)、語学留学中の金真美江さんも参加。仕事はデザイナーが多いが、板前、学校講師なども。参加できなかったが、岡田有可子(83M)、的場民枝(86E)さんも活躍中。

ダウンタウンの中華料理店で一次会のおと、雨の中、日本酒バーへ。牧浦さんの言葉を借りると「酒を飲んで酔っぱらって自分達はまるで岩倉にタイムスリップをしたように感じていた。みなさんそれぞれにがんばっていました。」

■韓国支部設立準備始まる

この九月、折から「秋夕(チュソク)」の「民族大移動」のなか、



人文学部の洪洞圭先生とともに、釜山、大邱、大田、ソウルを訪ねた。

■同窓会設立については

- 実質的な内容のある会にしたい
- まず精華出身者による作品展を開いてみてはどうか
- 卒業生の就職などにも役立つように

- 人文学部と美術学部の折合いをどうするか
- などの意見がだされた。ソウル

では近々、集まり意見交換することになった。副会長の入江完氏がソウル在勤中なので、いい結論が得られることと思います。顔を合わせたメンバーは次のとおりです。

金琪祚(82V)、金大鶴(83V)、朴鏡淳(83E)、盧承鉉(85V)、李殷瑩(90YL)、洪慶姫(92XT)、金宣住(93XD)、李璟来(94MM)、朴義緒(93YL)。

なお、金琪祚氏(大邱大学校美術大学副教授)は現在、東大邱駅の陶板壁画(高さ約5メートル、横約20メートル)を制作中です。

注:ニューヨーク支部は、現時点に於て未だ認可されていません。

最近想ひごと

人文学部助教授 梶川よ志子

ととてもとても暑い夏が終って、急に涼しい秋になりました。同窓会員の皆様は、お元気で御活躍のことと思います。

この九月に新しい建物の食堂やクラブボックスが完成し、夏休みが終わって大学へ出て来た私は、学生といっしょになってびっくりしています。広々とした食堂や購売部の本棚を喜んでる学生達を見て、とりあえず良かったと思っています。

一九八九年に人文学部ができて以来、私達を取り巻く状況は、年

を追って過速度的に速いスピードで動いています。おかげで、人文学部がきたら少しはゆっくりできると思かにも考えていた私は、その悲願もむなしく、相変らずというよりさらに忙しく日を送っています。まさに、貧乏ひまなし！

冗談はさておき、精華大学も世の中の動きと無縁ではいられません。十八才人口の減少や大学進学卒の上昇が、大学のあり方を量的にも質的にもゆさぶっています。

この二十五年間に大きく成長してきた精華大学はその大きさに負けずに、精華らしさを失わずさらに質的に発展していきけるか、今後の方向性を決める大切な時期にあると思います。

私も、大きな動きの渦の中に巻きこまれつつも、日々の授業での学生との接触という原点を忘れることなく、新しい目標を定めて泳いで行きたいと願っています。精華大学を卒業して外から大学を見ている同窓会員の皆様は、今を生きる精華大学についてどんなお考えをお持ちですか。また、いろいろお話ししたいですね。



京都精華大学木野会

第2回

数珠つなぎ

だるまさんがころんだ
 ■前号 森下みゆさん からの紹介です。

●精華大学同窓生、職員を交えて、数珠つなぎで紹介して頂いています。



①69 T 福田妙子 (旧姓 北河)
 ●京都市右京区西院在住
 ●染織図案
 ●写真は去年の12月のものです。短大の時と変わらせずに今もかわいい。おばさんしています。



②69 T 牧田通子 (旧姓 辻)
 ●京都市右京区西院在住 ●主婦
 ●37才でやとつと授かった一人娘を臨産時で亡くしました。わずか7年の生命でした。夫と二人やっとならぬ。頑張ります。



③69 T 今井真理子 (旧姓 保母)
 ●名古屋市天白区在住
 ●子育で、養護師の仕事に追われ、それでもいつまでも夢は学校の延長にあります。糸に触れているだけで心が安まり、幸せです。



④69 E 小林ふみ子 (旧姓 依田)
 ●京都市上京区在住 ●主婦
 ●我欲ではミラサキをかつて、子育で終わったので、ウサギの教育をしています。茶色はオステアチヤナ(茶色)グレイと白のはいたはソラ(空)です。庭中、二人で走りまわっています。



⑤69 E 松下恵子 (旧姓 寺尾)
 ●京都市上京区在住
 ●今年で結婚して20年、四人の子供も将来の自分の通を決められる年になりました。私早く自分の事考えられる余裕がほしいと思っっている。日この通です。



⑥69 E 久留島光子 (旧姓 玉江)
 ●広島県安芸郡在住
 ●懐かしい音、お元気ですか。私は遅かった結婚のせいか、気分は今も苦いつもりで、子育で、家業にと多忙な毎日頑張っています。



⑦70 P 白井真利恵 (旧姓 中村)
 ●京都市左京区在住
 ●柳丸昌 美術部 (主任)
 ●大学時代に始めた、贈答ポールのどんぐりの織設計図を描く仕事を続けております。同窓会を開きませんか。



⑧71 P 森田洋子 (旧姓 人見ひろ子)
 ●京都府城陽市在住
 ●猛暑の中、今クレーのないアトリエで、カメラリと格闘しています。19年振りの個展キヤラリー 9/12/9/17 を感懐のなか開催させていただきます。



⑨86 P 49 米田和秀
 ●京都市伏見区在住 ●京都高等工芸学校
 ●私は放射線検査士の資格を、守衛さん見回りに来た時、私は毛糸の下の四股を折り曲げ、友人二人で隠れていました。髪を削って作品に打ち込んだ日々、今も時々前を見て頑張っています。

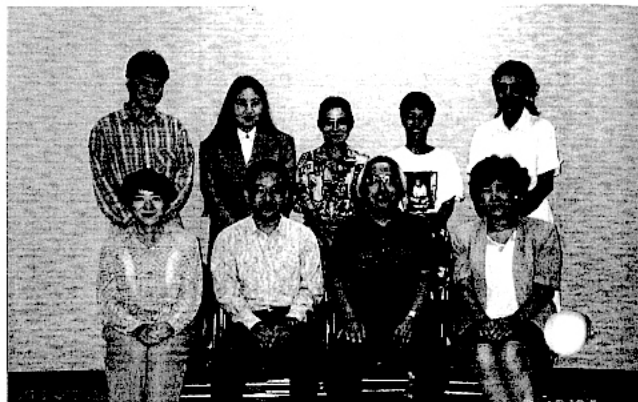


⑩86 P 23 高橋雅史
 ●京都府宇治市在住
 ●独立美術協会委員、スクラアートサロン講師
 ●現在も描くこと中に頑張っています。あの幻のバンド、「岩倉ナチュレル」のペーシストも、おとうさんになりました。

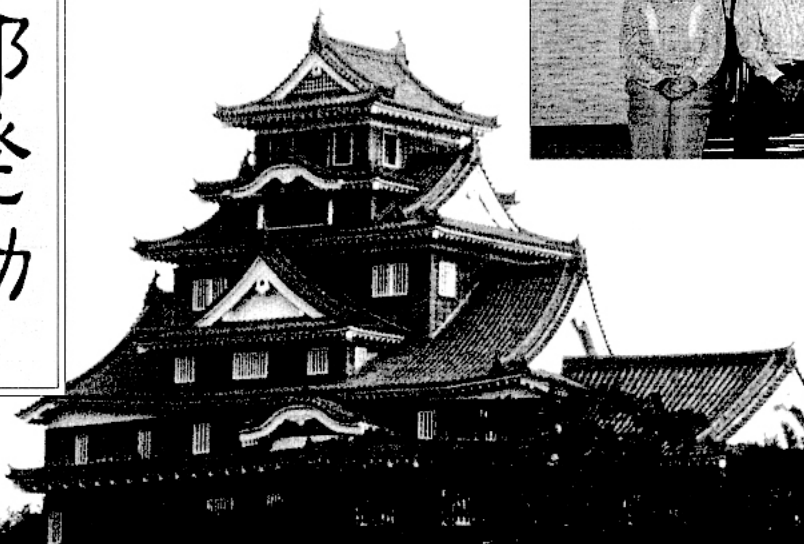
■次号は 87 P 築山佳民さん から

Who's Who

◆飛翔する卒業生達◆



〃西日本支部発動〃



今年も又、小野会報を発刊する時期となりました。年私達は、滋賀県信楽町に在住の卒業生の方々と、楽しい一時を過ごし思い出話に花を咲かせて帰って来た訳ですが、今年も、岡山へと飛んで参りました。と言いますのも昨年発刊の木野通信に同窓会に關してのアンケートハガキを同封致しましたところ一昨年に設立された東京支部に対してやはり西日本に在住の同窓生の方々の窓口を設けなければならぬという意欲的な意見を得ることが出来ました。そこで今回の「Who's Who」では岡山、広島、山口に在住の卒業生にお集まり戴き、西日本支部設立準備に向けての話しや在学中のエピソード、今、外から見た精華大学のイメージなどについて話を伺う場を設けました。都合により集まって下さった方々は四名でしたが、来春、第一回の西日本支部設立準備同窓会を開催する方向で話が進みました。当初では中国地区・山陰地区・四国地区・九州、沖縄地区という細分化された単位で設立しようかという意見もあつたのですが、名簿に乗っているのは、実家の住所で本人達は別の場所に住んでいる場合が多いという事もあり小規模支部にせず、西日本支部という大きな器で西日本在中の卒業生に広く参加、協力して戴こうということになりました。実家を離れて東京やその周辺で一人でやっている卒業生達にとつてお互いの情報交換や一種のノスタルジアで会の活動も活発に動いているという東京支部との特色の違いとして、生活の基盤というのがそこにあり、そう寂しくもないし、尤もに卒業生同志が会って「懐かしいな」位のことや済んでいくのが実際の状況なのかもしれません。でも今回集まって下さった方々に精華で過ごした二年間の話を聞き、ただ単に「懐かしいな」

では終らない、すばらしいネットワークが広がるという確信を持つ事ができました。地方から精華に入学された人達の中には二年経てば又、ふる里に帰らなければならぬという思いで学生生活を過ごされた訳で、その学生生活がすばらしいはずばらしい程、無念の帰省となったそうです。やはり短大二年間というのは、あまりにも短かく何か京都に忘れ物をしてきた様な思いだと語って下さった。田舎で中学、高校と経て精華の自由自治の精神にふれ、始めて自由という意味が理解できたすばらしさを味わった人達が、郷里へと戻り、就職、結婚と経て、あの経験があつたからこそ今がある。精華は「元気の源」と語って下さった。そんな思いを持ったまま郷里に帰った卒業生の方々が、ああ〇〇先生にお会いしたいなと思つてもなかなか会えない訳で、観山電車も本数が増え、精華大学前駅も出来、便利になつているのにもかかわらず足がむかないという卒業生も多い様だ。来春の西日本支部設立準備同窓会に多くの先生方の御出席をお願いし、多くの卒業生の方々の御参加に期待を賜まさせていただきます。

この度、参加下さった方々のお話を聞き、私達同窓生は、私立大学についていうならば、後五、六年も経ては非常に子供の数が減り、いわゆる受験戦争という様なものがなくなり、逆に学生の方が、入りたい大学、いい大学に入れる様な状況になつてきています。精華大学が、私達の経験した同じ大学のまま残っている様に頑張らないといけないと思つていました。その為にはまず全国に散らばつて同窓生同士の情報交換とネットワークづくりではないでしょうか。ただ「懐かしい」だけで会つてもよし、同窓生が、どんなに社会で認められ、活躍しているかを皆様に知らせる事で、誇りや励みになればすばらしいと思つています。

未来を語り、今を行動する会

木野会西日本支部 結成!!

私も卒業後、約20年が過ぎた。私は精華には3年在籍した。私の人生の3/40を精華で過ごしたわけであるが、私の人生のうち「思い出の半分」は精華での3年間に集中していたような気がする。毎日が波乱と希望にみちた時代。もし取り戻せるのならもう一度あの輝いていた時代を取り戻したい。卒業生の多くは、仕事に追われ、家事に追われ、あの頃の輝きを失いかけていないだろうか。

卒業年度、卒業学科が違っても「精華」という共通のバックボーンを持つかぎり卒業生が結束すれば何かができそう、そんな気がする。

同窓会というと、どうも湿っぽいイメージがしてしまうが、私は、過去を懐かしむだけの会には余り興味はない。未来を語り、今を行動する会。まさに「精華」の精神が生きているそんな同窓会ができればと考えている。

精華大学に何か置き忘れてきちゃった、なんて気がしているあなた、精華大学で学んできたことの続きに、もう一度取り組んでみないか。結果として、何かが生まれるかもしれないし、何も変わらないかもしれない。ただ行動を起こすことは、決して無駄ではないと思う。

74D 津下勝年

①77D ②大学の専攻科を卒業し、やはり親の反対がありまして「娘は帰るべきだ」ということで引き戻されて、自由をさせてもらったのだからいいやと思って帰ったのですが、いざ就職となるとそういうデザイン関係の会社というのが一つしかなかったんです。それも毎週日曜日に出る日曜版みたいなのを企画する会社で人数制限もあり、難しかったです。しばらく販売関係の仕事をして働いておりましたが、数年後結婚し現在専業主婦をしています。

③今回声をかけて頂くまでは、子育てにおわれ大学の情報も木野通信と若干の友達からだけで自分は何をするかという様なことを考えてはありませんでした。今も自分の回りにどなたかいらっしゃらないかと聞かれても全然知らないです。卒業すると全く皆さんも家にこもってしまっているのか、顔を合わせることはますますなくなりました。今日ここに同席させて頂いて、同窓の人達に対する熱い思いを感じることができ、私の様な主婦にでもお手伝い出来ることがあればこれから協力したいなと思いました。

④全部が全部、目新しいことはかりだったので、すくなく楽しかったです。精華寮にいた人でしけれど専攻科に残ったメンバーで同じ下宿にかりわり自炊をするのですが、それぞれの土地の料理をつくりお国自慢をしたりしました。私は乗りやすいたちなので乗せられると「勿体ない、勿体ない」として食べちゃうので、「生きたゴミ箱」といわれたことも。体重も今の倍はあったかな。津下さん達がつくられた黒ボックスを燃やした年に入学したのです。あの黒ボックスって一種孤獨な雰囲気があり、何となく遠回りして帰ってました。部屋では出合わなかった様なユニークな人があの頃はたくさんいましたね。



●数井栄子
(旧姓 牧嶋)



青年期の感性

マンガ家 南久美子 70D (旧姓 園田)

京都市左京区在住

『どうしよう』 原稿の御依頼を受けて

すっきり考え込んでしまった。このコーナーでは楽しかった思い出とか懐かし人々の事を書かなければならないのだろうか、残念ながら私の場合、人生のバイオリズムの最悪の時期と学生時代

が重なってしまっていて、大そう重苦しい思い出ばかりしか残っていないのである。卒業して、すでに二十四年の年月が流れたが、私にとつての短大

生生活は『憂鬱』そのものであった。無邪気に笑って過ごした高校時代とは一転して、美術科であったせい、友が皆偉く

才能に満ち溢れているように見え、お腹の底から笑う事が出来なくなっていた。その上、両親の離婚等、家庭的なトラブルもあって、家にも大学

にも居場所がないよう、とても不安定な精神状態であったように記憶している。そして、あの木野の寒さ!!超

冷え症の私には、身体に霜柱が立つよう、冬は本当に辛かった。あの頃の私を暖めてくれたのは、友でもなく先生でもなく、駅前

で売っていたホカホカの『あんまん』だけだったような気がする。

そんなくらしい学生生活を送った私が、卒業後、笑いを作り出すマンガ家になって

しまった。クライアントの要望に応じているうちにだんだん個性を失くしていく自分の画風に悩みながらう。そして数年前、一大決心して強引に仕事の方向を変えてみた。幸いにも協力してくれる人々との出逢いに恵まれ、今、とり憑れたように各地で作品展を開催している。毎回エネルギーを使い果たす感があるが、自分の絵が描ける解放感と、会場での人々との出逢いがたま

らなく楽しくて、すっかり中毒になってしまい、自分やめられそうにない。その作品制作の度に、我ながら驚く事は、誰にも媚びず、思いのままに描くそれらの絵は、学生時代、課題に沿って無心に描いていた頃の画風にす



勝るとも劣らぬ青年期の感受性のすこさを、自分の体験をとおして思い知らされたような気がする。

作品展の会場には必ず作者のプロフィールを設けるが、それを見た人々が『精華なんですわね』と声をかけてくれ、私自身も改めて、『精華』を意識する。青春時代楽しめなかつた分、四十路でしみじみ母校の名を味わいたいと思う今日このごろである。

描いていた頃の画風にすつきり戻ってしまったという事である。戻るといふより二十四年間、何も変らなかつたのだから。あれほど憂鬱な学生生活であったにもかかわらず、その時に育った感性はしっかりと身体に刻み込まれてしまっているのだから。三つ子の魂に

懸賞作品募集

「表紙デザイン・文中カット大募集」

木野会会報紙では、表紙デザイン・文中カットを広く募集しています。表紙全面を、思い切りあなたの絵・デザインで飾ってください。また文中で使えるカット画もお気軽にお寄せください。会報誌名称については、校章も校歌も無い自由自治の精華の同窓会会報に、あえて、名称を決定しておりません。表紙・カットと共によい名称をご応募ください。

●賞金・賞品

表紙デザイン1点…3万円

文中 使用カット1点に付…テレホンカード

●応募方法

表紙サイズ：縦25.7cm×横18.2cm

技法：イラスト画、写真、版画など自由。ただし色は一色刷です。

カット画：自由に描いてください。作品の裏には必ず作品のタイトル・コメント・住所、氏名、学籍番号、電話番号



表紙制作者の横顔

浦本 紀子(旧姓 久津名)(77D)

美術科デザインコース10期生

昨年来から紙面で広く募集しております表紙デザインに、美術科デザインコース卒業の浦本さんの作品が選ばれました。浦本さんは現在ご主人と共に高槻市に窯を構え、絵付けの仕事をしています。今回は絵本クラス在学時代から描き続けておられる「きつねさん」の素描を送っていただきました。当時は精華の山にも時々狸やウサギが出て来たり、松茸や竹の子、栗などがいっぱいありました。

浦本さんに「賞金は何に使われますか?」の問いに、「子供が精華大学へ行きたいと言いつつに備えて貯金しておきます。」と笑って答えて下さいました。

木野会から

「木野会報は会員のみ配布」

精華大学同窓会会報紙は、会員にのみ配布されています。

木野会の運営・会報紙の充実を計るため、一人でも多くの方が木野会に参加されることを望んでいます。この会報紙の届いていない未入会のお友達を是非お誘い下さい。

●入会方法

郵便局備付けの振込み代金先方払い(赤枠)の用紙に学籍番号(入学年度・学部・学科)、住所、氏名(旧姓)電話番号を記入の上、終身会費1万円をお振込みください。

口座番号：京都 0・42332

金額：10,000円

京都精華大学同窓会木野会 宛

「ご投稿のお願い」

○木野会会報にふさわしい新コーナーのアイデアを募集しています。

○「Who's Who」のコーナーへの投稿・取材依頼、お待ちしております。

○展覧会、個展、イベント等の広報コーナー充実の為情報をお寄せ下さい。

○「This is my space」コーナーにお店や教室等広告を希望される方は御一報下さい。

「お願い」

卒業生宛の郵便物が転居、住所表示変更などのため返送されてくる場合がかなりあり、多くの卒業生が消息不明のままになっています。お友達の中で「木野通信」や木野会に入会しているのに「会報」等が届いていないという方がおられるようでしたら、必ず同窓会「木野会」事務局まで、その方の氏名(学籍番号)と変更された住所をご一報ください。

また、お問い合わせ等がございましたら、ご遠慮なく「木野会」事務局までご連絡ください。

総会のご案内

「第8回 木野会総会」

とき：1995年11月3日(金祝)

午後2時～

ところ：京都精華大学・本館3F

懇親会：午後3時～5時

悠々館

本年は昨年来建設・造成を進められていた新校舎・体育館等も10月に竣工披露され、今回の懇親会ではその一つである悠々館を使って、懐かしい友達や先生方と大いに語り合っただけでなく、思っています。

大学では例年通り「木野祭」開催中もあり、懇親会後は学生達の模擬店に入り込むのも楽しみです。是非お友達と一緒に秋の木野、叡電精華大学前で降りてみて下さい。

木野会西日本支部結成のご案内

『支部結成の協力者大募集』

本誌Who's Whoで紹介されたように、来春「木野会西日本支部結成準備同窓会」

を開く運びとなりました。昨年のアンケートで西日本地区在住の方々から「精華」という共通のネットワークを使って「何かをしたい」「企画してほしい」といった声が多くありました。すでに地域の広報やデザイン関係を手伝いたいなど、力強い協力者も出てきておりますが、さらに運営を円滑におこなうために一人でも多くの協力者を募りたいと思います。

支部結成協力ご希望の方は、大学側より郵送される「木野通信」同封のハガキにてお知らせください。

その他、詳細は木野会事務局までお問い合わせください。

お知らせ

「新校舎 見学会のお誘い」

木野会総会開催に伴い、新校舎見学会を行って戴くことになりました。体育館・悠々館(食堂・ラウンジ・購売部)・遠友館(クラブボックス等)・グラウンドなど、今まで学生達が待望していたものが一度に竣工されました。この機会に是非御見学ください。

とき：11月3日(金祝)1時15分

ところ：同窓会木野会、受付カウンター前集合

「1996年10号アート実験展」

第二回アート実験展が開催される。精華大学美術学部の元講師であった鹿間厚次郎先生の企画で、陶芸家・ガラス工芸家・彫刻家・木工芸家・洋画家・日本画家など多分野の作家40数名が、10号の大きさの壁面作品で文字通り実験的な作品に挑む。精華大学新旧卒業生も数名出品予定です、是非御高覧下さい。

とき：'96年1月14日(日)～1月28日(日)

ところ：大和ギャラリー

大阪市阿倍野区阿倍野筋4-18

-30 ☎06(652)3256

地下鉄谷町線阿倍野駅⑤出口

編集後記

秋になり、涼しい日が数日続くと、暑かったあの夏の日々を忘れてしまいます。でも、決して忘れてはならない事が、今年はいくつもありました。学んだ事の寸分の一でも実生活に生かされればと思います。ご協力下さった皆様、ありがとうございました。亦、御意見をお待ちしております。

●京都精華大学同窓会 木野会

〒606

京都市左京区岩倉木野町137

TEL.(075)702-5201

FAX.(075)722-0838